僕は

芥川龍之介

誰でもわたしのやうだらうか？――ジュウル・ルナアル

僕は屈辱を受けた時、なぜか急には不快にはならぬ。が、彼是（かれこれ）一時間ほどすると、だんだん不快になるのを常としてゐる。

×

僕はロダンのウゴリノ伯を見た時、――或はウゴリノ伯の写真を見た時、忽ち男色（だんしよく）を思ひ出した。

×

僕は樹木（じゆもく）を眺める時、何か我々人間のやうに前後（まへうし）ろ

のあるやうに思はれてならぬ。

×

僕は時々暴君になつて大勢（おほぜい）の男女（なんによ）を獅子（しし）や虎に食はせて見たいと思ふことがある。が、膿盆（のうぼん）の中に落ちた血だらけのガアゼを見ただけでも、肉体的に忽ち不快になつてしまふ。

×

僕は度たび他人のことを死ねば善（よ）いと思つたことがある。その又死ねば善いと思つた中には僕の肉親さへゐないことはない。

×

僕はどう云ふ良心も、――芸術的良心さへ持つてゐない。が、神経は持ち合せてゐる。

×

僕は滅多（めつた）に憎んだことはない。その代りには時々軽蔑してゐる。

×

僕自身の経験によれば、最も甚しい自己嫌悪（けんを）の特色はあらゆるものに譃（うそ）を見つけることである。しかもその又発見に少しも満足を感じないことである。

×

僕はいろいろの人の言葉にいつか耳を傾けてゐる。

たとへば肴屋（さかなや）の小僧などの「こんちはア」と云ふ言葉に。あの言葉は母音（ぼいん）に終つてゐない、ちよつと羅馬字（ロオマじ）に書いて見れば、Konchiwaas と云ふのである。なぜ又あの言葉は必要もないSを最後に伴（ともな）ふのかしら。

×

僕はいつも僕一人ではない。息子（むすこ）、亭主、牡（をす）、人生観上の現実主義者、気質上のロマン主義者、哲学上の懐疑主義者等（とう）、等、等、——それは格別差支（さしつか）へない。しかしその何人かの僕自身がいつも喧嘩するのに苦しんでゐる。

×

僕は未知（みち）の女から手紙か何か貰つた時、まづ考へずにゐられぬことはその女の美人かどうかである。

×

あらゆる言葉は銭のやうに必ず両面を具へてゐる。僕は彼を「見えばう」と呼んだ。しかし彼はこの点では僕と大差のある訣（わけ）ではない。が、僕自身に従へば、僕は唯「自尊心の強い」だけである。

×

僕は医者に容態を聞かれた時、まだ一度も正確に僕自身の容態を話せたことはない。従つて譃（うそ）をついたやうな気ばかりしてゐる。

×

僕は僕の住居（すまひ）を離れるのに従ひ、何か僕の人格も曖昧（あいまい）になるのを感じてゐる。この現象が現れるのは僕の住居を離れること、三十哩（マイル）前後に始まるらしい。

×

僕の精神的生活は滅多（めった）にちやんと**歩い**たことはない。いつも蚤のやうに**跳ね**るだけである。

×

僕は見知越しの人に会ふと、必ずこちらからお時宜（じぎ）をしてしまふ。従つて向うの気づかずにゐる時には「損をした」と思ふこともないではない。

（大正一五・一二・四）

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社
１９６５（昭和40）年12月20日発行
※底本の「羅馬字（ロオてじ）」は、「羅馬字（ロオマじ）」にあらためました。
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月27日公開
２００３年10月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。